

## 成迫忠邦さんの思い出

武田 剛

(会員 佐伯市木立)

私の村木立に成迫忠邦さんという眉目秀麗な大学生がいたが学徒出陣で戦争に行き戦犯になり二十八才の若さで処刑された。その忠邦さんの痛恨の思い出を書きたい。

私が小学校二、三年の頃、中学生の兄が自転車の後ろに乗せてくれて忠邦さんの家に連れて行ってくれた。忠邦さんは兄より二つ三つ年下で中学一年か二年だったと思う。忠邦さんの家は、わが家から三キロ程はなれた大中尾の大きな農家で家号はフタセゴと呼ばれ、お父さんは亡くなっていたが元村長さんだった。母屋の前には大きな二階建ての蚕室があり、佐伯中学の学校林の手入れをする生徒が五〇人も寝泊り出来る家だった。

忠邦さんのお母さんが母屋の縁側でパインの缶詰をこちそうしてくれた。うまかったので汁まで飲み干した。そ

の空カン一杯、忠邦さんは近くのくぬぎの木をゆすつてクワガタを捕ってくれた。カンの中のクワガタのガサガサイ音がまだ耳に残っている。

私が中学生になった頃、道でばったり忠邦さんに会った。日本大学の角帽をかぶっていた。五百戸の村で大学生はたった一人だったと思う。忠邦さんは満鉄に行った兄のことをたずねてくれ、角帽をぬいで私の頭にかぶせてくれた。忠邦さんは子供の私が見てもまぶしい程の美男子だった。今テレビで俳優の安部寛という人を見ると「ギク!!」とする程そっくりである。その頃小学生だった私の家内は忠邦さんが学校に来てオルガンを弾いたのを覚えているという。白いズボンをはいていたそうだ。

戦況が悪化し、大学生も学徒出陣で戦地に行くことになった。忠邦さんは海軍を志願した。成迫家は出征する忠邦さんに軍刀を持たせるため、木立で指折りの見事な杉山と近所の人が大事にしていた名刀を交換した。

その刀を腰にした忠邦さんは沖繩の石垣島第二迫撃砲隊に一等兵曹として配属された。戦況は敗色が濃厚となり、やがて石垣島にも米軍機の来襲が始まった。激しい空襲、必死の応戦で撃墜した敵機から脱出した米兵の三人の

捕虜を、海軍石垣島警備隊指令・井上乙彦大佐から処刑するよう命令された。異常な戦場の空気の中、命令には抗しきれずやむなく斬首したという。あの杉山と交換した刀で斬つたのであろうか。

日本の軍隊では上官の命令は天皇の命令で、逆らうことは許されなかった。あの優しい忠邦さんも命令に服従するしかなかったのだ。

敗戦で忠邦さんは復員、私の留守中、戦死した兄のお悔やみに来てくれたという。忠邦さんは間もなく県職員採用試験に合格、身内だけのささやかな祝いの席から戦犯として連行されたという。敗戦のあくる年、昭和二十一年の一月二十七日だった。私は復員した忠邦さんに会うことはなかった。

忠邦さんは「極東国際軍事裁判」いわゆる「東京裁判」でBC級の被告になった。そして約二年の裁判の後、二十三年三月十六日にまさかの死刑判決が下った。この事は村中にかつてない衝撃をあたえた。木立の五〇〇戸の村で一〇五人の戦死者がありながら、戦犯死刑というのは又別の凄いショックだった。

すぐ助命嘆願の署名が行われ、ほとんど全村民の署名が

集まり、当時村長だった父がそれを持って上京した。一週間程して帰った父は状況が悪かったのか何も言わず「村上代議士が大そう骨を折ってくれている」と言った。ただ代議士は父が教師になって最初の教え子である。

昭和二十四年の三月始めに役場の村長宛に、みんながすぐる様な気持ちで待った再審の結果が届いた。あの助命嘆願の効なく再審も死刑だった。父はそれをすぐに成道家に届けねばならなかったが、中々出かけようとしなかった。夜、フスマ越しに父の嗚咽を聞いた。兄の戦死以来である。戦死の公報ならまだしも戦犯死刑再確定の知らせである。それも元村長の家に、老いた母のもとに。父も足が重かったであろう。三月八日、父はもう引きのばせなかった。持つて行くのを決心したようであった。

その日役場の隣の川野のおばあさんの葬式に加勢に行っている父がお悔みに来た。背をまげて大そう老けて見えた。葬儀がすんで養賢寺の大和尚を大八車（当時はリヤカーすらなかった）に乗せて寺まで送つての帰り道、茶屋ヶ鼻の橋の上で自転車で息をきららして迎えに来た人が「お父さんが倒れた、早くこれに乗って帰れ!!」と言う。自転車に飛び乗って帰ったら、父は忠邦さんの家に行く途中わ

が家から一キロ程の所で倒れ、戸板に乘せられていて、その場で医師の谷川先生の治療を受けていた。

狭心症だという。

みんなからかかえてもらって家につれ帰ったが一晚中発作で胸をかきむしって苦しんだ。その発作の合間に、内山田村会議長には「木立川の堤防をたのむ」、私には「治郎(弟)を可愛がれ」。そして役場の職員の中谷さんに「中谷、あれをフタセゴに届けてくれ」と遺言し、あくる朝の七時に絶命した。昭和二十四年三月九日、五十六才だった。

父の内ポケットの忠邦さんの判決文は、葬儀が終わって三月十六日に中谷政治さんの手で成迫家に届けられた。中谷さんは父と同級生で仲が良かった。中谷さんも長男、次男の二人の息子さんが戦死していた。

父の死は成迫家から巢鴨拘留所の忠邦さんに知らされたのか、忠邦さんから丁寧なお悔みの手紙が届いた。死刑囚からお悔みの手紙である。薄い便せん四枚にびっしり書かれている。母はそれを読み、せき上げて泣いた。お悔みの文のあとに「自分はもう佛のふところに抱かれたような気持ちである。決して心配してくれるな」という悟りのような事を書いているのが何ともやりきれなかった。しかし

その手紙の終わりに数首の歌が添えられてあった。その中の一首

盃蘭盆うさげぼんのひと夜衣とりかえて

我と踊りしかの少女はも

以来私は盆踊りがつらい。

父の死からようやく立ち直って青年団活動に復帰した昭和二十五年の一月、全国青年団協議会が主催する「産業一人一研究発表大会」の県予選で、青年団の仲間とまとめた「木立村の酸性土壌の研究」が一位になり、東京の全国大会で発表することになった。

しかし折角上京するのに発表だけではもったいない、裁判で三審を申し立てている忠邦さんのため嘆願書を持って行こうということになり、青年団員は手わかってまたたく間に全村民の署名を集め、私は団員からのお饞別で汽車のキップを買い、リックサックに署名簿と上京中食べる米を六升ばかり入れて「よしこの署名簿で助命をかちとつてみせる」と、はやる気持ちで汽車に乗り込んだ。助命嘆願などどこでどうするのかさっぱり知らないまま、行けばどうかなるといふ旅立ちだった。

東京までの途中の都市はほとんど焼野原だった。米軍は無差別に焼夷弾をばらまいたのだ。広島では街のまわりの山々までが赤く焼けていて原爆のすさまじさをまざまざとみせつけられた。東京もまさしく焼野原だった。一晩で十万人が焼死したという東京大空襲を実感した。

青年団の発表は昭和二十五年の三月に小金井の浴恩館というところであり、私は発表すると結果も聞かず、心頼みにしていた祖母の実家の長男阿部克己の経営する会社「太三機工」を銀座に訪れた。水道工事の会社で後年東海村の原発の給排水工事などをやった。木立小学校にピアノも寄附してくれた。克己兄は早速靖国神社と阿部の二男の成己兄の働く「大和土建」につれて行ってくれた。靖国神社では兄がまつられているという実感は湧かなかつた。「大和土建」は村上代議士の会社で後に「村上建設」になったが、成己兄は設計課長をしていた。成己兄は後で佐伯市役所、中ノ谷トンネル、椎葉ダムなどを所長として手がけた。成己兄にたのんでいよいよ巢鴨の拘留所の忠邦さんに面会に行った。巢鴨の駅に降りると一面の焼野原に高さ七、八層はあろうかというコンクリートの高い壁がえんえんと連なっていた。「あの中に忠邦さんが居る、やつと会え

る」と、高鳴る気持ちでその壁にたどりつき正門をめざした。門には白いヘルメットにMPと書いた米兵が二名、カービン銃を横に持って立っていた。門の前に小さな事務所があり米兵と日本人も居た。

「成迫忠邦さんに面会したい」と告げると「本人との関係は？」と聞く。「同郷の後輩です」と言うと「肉親でなければ駄目だ」と言う。成己兄も「折角九州から来た。是非たのむ」と真剣に言ってくれ、署名簿も見せたが係は首を横に振るばかり。「私には権限はない、気の毒だが帰りなさい」と言う。目の前に忠邦さんが居るのに会えないのだ。私は門に近づき思わず中に入ろうとした。すると大声で「ストップ!!」と言われカービン銃で押し戻された。見上げるような大男だった。

成己兄が「仕方がない、帰ろう」と言う。

すすすご帰りがかったが私はコンクリートの壁を見上げ、この中に忠邦さんが居る、おらんだら聞こえるかもしれないと思つて声を張り上げた。「忠邦さーん、忠邦さーん、武田のこうです、忠邦さーん」と壁をたたいて幾度も叫んだ。しまいにはただ情けなくて座り込んでわあわあ泣いた。

その晩成己兄の家に泊まった。錦糸町駅の近くの焼跡に建てたバラックの家だった。

私は「よし!!明日はGHQに行こう」と腹をきめた。東京の街にはいたるところでアメリカ兵に抱きつくように歩く日本女性の姿があった。日本兵が命をかけて鬼畜米兵から守ろうとした大和撫子の姿だった。

GHQに接収された第一生命ビルはビルの前面一杯にギリシャの神殿のような大きな円柱が十本ほど立っていて、お堀越しに広い皇居を威圧しているかに見えた。そのビルにカーキ色のジャンパーのような軍服をびったり身につけたスマートなおびただしい数の軍人がジープで乗りつけさつそうと出入りしていた。めずらしい女性の軍人も居た。顔がピンク色で金髪で胸を突き出し長い足をけり出すように大マタで歩いている。

私はアメリカは民主主義の国だからGHQを訪ねたら玄関の受付に日本人の通訳がいて要件を聞いて取りついでくれるだろう位の安易な考えだった。それはたちまち打ち碎かれた。とても近寄れる雰囲気ではなかった。

誇らしげに闊歩する将校達の姿に一発の原爆で十万人を殺しても平然としている勝利者の非情と傲慢さがあつ

た。私は足がすくんだ。「ああ戦争に負けたんだ」とおもい知らされてヘナヘナと座り込みたい程気落ちし、堀端の柳の木をつかんだ。GHQに乗り込む高ぶった気持ちもたちまち萎えて、西の方のほこりっぽい空に浮かぶ国会議事堂に向かつてすすご重い足を運んだ。とにかく村上さんに会ってみようと思った。

国会の議員会館で村上代議士に面会を求めるとすぐ、秘書の伊東敏武さんがまだ軍服のような国民服を着て「やあ!!」と手を挙げて現れた。伊東さんは市内の上久部の出身で代議士の選挙で父を訪ねて来られたとき会っているのになつかしかった。伊東さんは「先生は今度委員会で委員長をしているので席がはずせない、折角来てくれたのにすまない」と言う。又してもがっかりしたが私は伊東さんに父が上京した時と葬儀の時のお礼を言ったあと「成迫忠邦さんの助命の嘆願に来たけれど、どうしていいかわかりません」と言った。伊東さんは「私も成迫君とは佐伯中学の同級で仲良しだった。私も同級生もいたたまれない気持ちでいっぱいだ。先生と一緒に出来る事はやってきたが占領軍の裁判ではどうすることも出来ない、申しわけない。先生も非常に心配しています。署名簿は私が責任をもって

弁護人に届けます。」と言ってくれ、「重かったでしょう」と言っ  
て受け取ってくれた。私はせめて「弁護人に会いたい」と言  
ったが「裁判は横浜で行われており弁護人がすぐ会って  
くれるかむつかしい」と言う。私は伊東さんの苦しそうな  
表情を見てあきらめた。そのあと食堂でカレーを御馳走  
になり本会議場も見せてもらった。

伊東さんはその後「藤巻」という姓にかわり、永く村上  
代議士の片腕として国政に郷里のために働かれた。

帰りはすし詰め列車に四十時間ゆられて帰りつき、す  
ぐ青年団総会で上京報告をした。「折角の署名簿も役に立  
つかわらない」と報告したら、二百人近い団員が皆じっ  
とうつむいて誰一人質問をする人もなかった。「駄目か」と  
いう失望の空気だった。

忠邦さんに「面会に行きましたが会うことが出来ませ  
んでした」と手紙を書いたら、すぐ返事が来て、わざわざ来  
てくれたことを感謝する言葉のおわりに次のような歌が  
添えられていた。

いくばくの我の余命か今日も又

母の写真を取り出して見し

この歌に胸が突かれるような想いがしたあとすくの、四

月の初め村に激震が走った。四月七日に忠邦さんが処刑さ  
れ遺骨が帰ったという。呆然として、お悔みに伺った。星  
の見えぬ暗い夜、成道家はあかあかと灯がついていた。沢  
山の弔問の人は皆おこったような顔をしてあまりものを  
言わなかった。

遺骨の前にお母さんが打ち伏していた。忠邦さんは「忠  
邦は春雨に濡れて行ったとみんなに伝えてください」と最  
後の言葉を言い残し刑場に入ったという。私は歯がみする  
ように悔しかった。

忠邦さんは獄中に四年三ヶ月、それは処刑におびえなが  
ら絶望と望郷の毎日であったろう。その心を想うとき私は  
忠邦さんを裁いた極東軍事裁判をもっと知りたいと思っ  
た。調べるとつれて忠邦さんと同じくBC級戦犯で処刑さ  
れた将兵が九二〇人もいたことを知った。その人数の予想  
を超えたあまりの多さにかく然とした。この九二〇人はほ  
とんど国際法の捕虜虐殺の罪だった。

日本の軍隊は将兵に対し国際法で捕虜は保護しなければ  
ならないことを教育しなかった。それどころか最後まで  
戦わせるため「生きて虜囚のはずかしめを受けず」と戦陣  
訓で徹底抗戦を教育した。日本兵は生きて捕虜になること

を最大の恥辱と教育されたのだ。そのため投降ということ  
を知らず玉砕。つまり全滅するかジャングルに逃げ込んで  
餓死するしかなかった。

日本兵戦死者二二〇万人のうち半数以上の一四〇万人  
が餓死した。弾に当たって死ぬより餓死者の方が多かった  
のだ。外国のように捕虜になるのが不名誉でなかったら、  
どれだけ多くの兵が助かったであろうか。そして捕虜を卑  
怯者としてべつ視せず大事にあつたて殺さなければ、と  
ても九二〇人が処刑されるようなことは無かつたと思つ  
て。私は、無謀な戦争を始めた過激な軍人や国際法を知ら  
ない軍の統制の責任者の処罰が、あまりにも少なく軽いと  
思つた。無謀な作戦を強行した大本營の参謀達はほとんど  
処罰されていない。BC級は九二〇人に対しA級はたつた  
七人、これでは国や軍の巨悪に対しあまりにも寛大ではな  
いか。

そして極東軍事裁判では陸海軍を統帥した天皇の戦争  
責任がとうとう問われなかつた。私はなぜだろうと思つ  
た。すべて天皇の軍隊、皇軍のやつたことであるのに。

私は極東軍事裁判を研究した本をいろいろ読んでい  
るうちに、天皇はマッカーサーを十一回も訪問したことを知

つた。十一回も何を話したのかだんだん解明されてきた。  
マッカーサーが任を解かれ離日するとき、天皇は「極東軍  
事裁判に感謝します」とお礼を言っている。これは御自身  
が戦犯をまぬがれたお礼だろうか。股肱の臣が九二〇人も  
処刑されたのに、なんでお礼を言ったのであろうか。もし  
魂というものがあるとすれば九二〇人は永遠に浮かばれ  
まい。

その上天皇は、東京をはじめ日本の主要都市を爆撃し焼  
きつくし、広島・長崎に非人道な原爆を投下した米空軍最  
高司令官カーチス・ルメイ將軍に勲一等旭日大綬賞を贈  
っている。我が国最高の勲章である。なぜか。これを新聞  
で知つたとき、私はにえ湯を飲まれたような気がした。  
日本兵の犠牲者二二〇万人のほとんどが最低の勲七等、八  
等であるのに。

国際軍事裁判は国際法に基づいて行われたが、今までの  
捕虜虐待の罪だけでなく、新たに「人道と平和」に対する  
罪を規定した。A級戦犯の東条などが処刑されたのは、こ  
の平和に対する罪である。

人類史上最大の惨過の戦争を始めた責任者の処罰は、国  
際裁判として当然なさねばならない。東条などの処刑は当

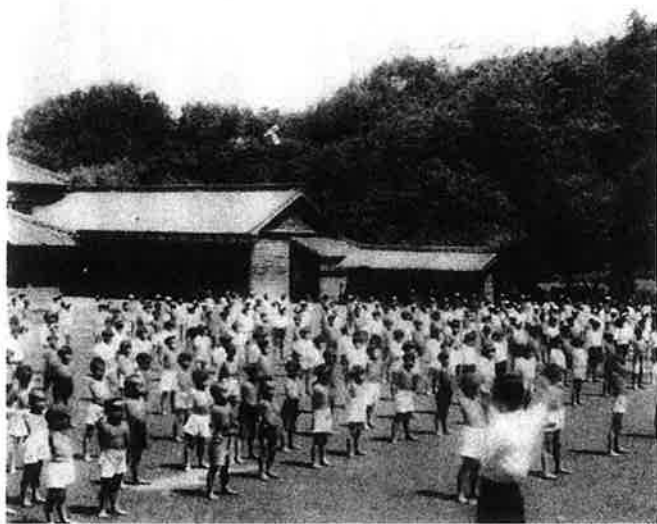
然である。

しかし、新しい規定の国際法「人道と平和に反する罪」で裁くなら、原爆で二十万人を殺したアメリカと、敗戦後の日本兵捕虜五十万人をシベリアに抑留し六万人の犠牲者を出したソ連は、人道に反しないのか。これに知らん顔をした極東軍事裁判はやはり公平な裁判とは言えず、勝者が敗者を裁くお仕置裁判だった。

忠邦さんの死後六十年、孫が奇しくも忠邦さんと同じ日大に入学した。孫の顔をじつと見つめながら、二十八才の命を奪われた忠邦さんの無念さとお母さんの痛苦を想った。

私は忠邦さんを忘れない。

今からの若者に伝えたい。「戦争するな、戦争に行くな、人を殺すな、殺されるな。戦争をしていいことは何も無いのだ。国家には命を捨ててまで護らねばならぬ程の価値はないのだ。なぜなら国家が国民を殺すからだ」。



戦前の木立小学校